

美術の窓(52)

日本の水墨画と雪舟

大和文華館館長 吉川 逸治

日本美術史のうえで、室町時代の水墨画の登場は新しい近世美術が準備される画期的な事件でありました。まず、日本の水墨画は、鎌倉時代の禅林のなかに慎ましく発足しました。それは紙片に数条の墨線で禅宗の人物や花草を描くことから始まり、やがて山水を描いて、そこに詩文を寄せるという、いわゆる詩画軸という、これまではない画僧個人の内心の小宇宙を披瀝する類のものでした。このような水墨画は従来の古典絵画の伝統とも、大和絵の伝統とも異なった、新しい性格の絵画構想をうちたてました。

水墨山水画というものは、写生画ではありません。日本の画僧たちは南宋の画院の山水画家たち、ことに十三世紀の馬遠・夏珪らの山水画の方式をかりて、自分たちの大自然に対する思考を紙の上に水墨で綴ったのです。山・岩石・樹木・水流・雲霞など個々の形とその描き方、風景の構図まで、いわば馬・夏の造形言語の単語から文章法までかりて、彼らの詩情を侵透させて、表現させるので、木の緑や花の色を超えて、自然の永遠の相と共感しようという禅僧の抽象的な思考には、色を棄てた堅固な形からなりたつ水墨の山水画が好適だったのです。美術のみではなく、すでに鎌倉時代から、日本の詩歌は色香鮮やかな人間の情緒の表面的な現われよりも、自然の奥に潜むより深い真理にひかれ、抽象への感受性をうたって連歌を

綴るようになりました。

しかも、これまでの仏画や障屏画・絵巻物がとりあつかってきた、横にひろがる平面展開の空間構成とは違って、考え、また感じつつある自我に呼应し、意識の響きを生かす空間構成は深い奥行きをもたねばなりません。この無限の空間を暗示するために、近くの岩石・水流・樹木などが整えられ、遠くの山々が描き添えられてゆくのです。

室町時代の禅僧たちは、宋元文化に対する教養から、中国山水画を新しく学びとることにようになりますが、この宋代の山水画自体、中国の宇宙論の伝統のうえに発展してきたもので、しかも、宋代の哲学者たちの自我の探求を精神的背景として発展してきたものです。古典古代の透視図法をとりいれて、伝統的山水画像を再組織した唐朝の古典絵画の様式は、宋代になって個人の視覚を自覚して、より精密に主山を中央に整備されるのであります。

我国の禅僧たちは、やがてこの水墨山水、あるいは水墨花鳥を禅寺の襖絵の大画面に描いて、十五世紀中葉には白地に墨一色の新しい構成で室内を飾るようになりました。それとともに、日本的な自然感情が柔らかい煙雨や緑樹のおおう山容、水辺の叢林と花鳥などに表わされ、なかでも大徳寺真珠庵の蛇足と伝えられる花鳥や、山水の襖絵など、深い自然観照の精神を反映して、画格の高い、優美さを慎しやかに装おう筆法で表



●秋冬山水図(冬)
東京国立博物館



◎四季山水図(夏)
東京国立博物館

わされています。

しかし、可翁・如拙・周文などの先輩のあとをついで、日本の水墨画を大成させたのは雪舟です。雪舟の芸術の特徴は、禅林の冥想的環境を一步出て、新しい近世社会的造形建設を導くがごとく意志的で、行動的であることです。色を棄て、色を抑え、力強い筆線と墨の濃淡の調子で、山や岩石・樹木・土坡・水流などに立体的な形態を与えて、ものの存在を主張させ、ことに、この立体的な形態と墨線をもって、作品に堂々たる造形的權威をさずけています。力強い形態がしっかりと画面に位置づけられ、それらの前後関係から、画面空間の遠近関係がはっきりと構成されています。例えば、墨の垂直線は、形態の前後の関係、空間の奥行きを暗示し、水平線は安定とひろがりやを決定し、前後の推移・連絡を斜線が担当していると言えます。また、墨線はハイライトの紙の白地を生かし、陰影の淡墨とともに形態を生んでいるのです。雪舟は応仁元年(1467)、四十八才の時、入明して浙派の写実的画法を学び、天童山の实景にもとづいて描いたらしい、「日本禅人等楊」

と款した「四季山水図」四幅(東京国立博物館蔵)が彼の作風を決定したと思われます。こうして「鎮田瀑」「山水長巻」「秋冬山水」とつづくのです。

晩年の雪舟は、足下に展望する入江の天橋立とその周辺の山々に感動し、筆を重ねる姿をまざまざと想像させるような傑作を残しています。「慧可断臂」には彼自身の赤裸々な姿が余念なく厳しく洞窟の前にあります。彼の自我の躍動は無限に続いて、固定されてゆく画面の筆痕を無限に重ねても、なお画の外にふるえおののくがごとく余韻を響きわたらせています。「破墨山水」のなかば破墨的な山水の暗示は、このような彼の作画している意識の即興的投影でありましょう。

行動的な大画家として、雪舟がすでに襖絵・屏風絵のような大画面に山水花鳥を描いて、その構想を大きく実現したことは当然のことであったと思われます。雪舟の積極的な様式は、水墨画の大画面への進出を確立するもので、その影響は当然次の時代の絵画に大きく及んだのであります。

季刊 美のたより No.108

平成6年8月18日

発行 大和文華館